

ホタテガイ耳吊り用稚貝成育状況調査

相坂 幸二

はじめに

陸奥湾のホタテガイ耳吊り養殖は、1955年頃から試験的に行なわれ、一般にホタテガイ養殖現場において普及し始めたのは、1979年頃からである（青山，1988）。耳吊り養殖は、籠養殖に比べ生残率が高く、経費が安いことなどから用いられた養殖方法で、1982年には耳吊り養殖が陸奥湾の養殖数全体の73.9%を占め、現在でも約40%を占めている。

陸奥湾では毎年5月と10月に養殖ホタテガイ実態調査を行ない、ホタテガイの成育状況を把握し、養殖管理の指針としている。また、1月～3月の耳吊り作業時点でのホタテガイ稚貝の成育状況については、耳吊り養殖を実施している地域を中心に調査を行ってきた。調査は、1981年から水産増殖センター、青森地方水産業改良普及所、むつ地方水産業改良普及所、平内町漁業共同組合及び平内町役場が実施し、その結果は養殖管理情報等で漁業者に提供している。

本報告は、比較的調査方法が確立した1986年以降の調査結果から、各年の耳吊り作業時点でのホタテガイ稚貝の成長の経年変化をまとめたものである。

調査方法

調査は、毎年1月から3月までの期間行った。測定に供したホタテガイは、養殖籠から取り出し、選別作業をする直前の個体を用いた。稚貝の測定項目は、殻長・全重量・異常貝出現率等であった。

その他、作業方法について、穴あけ法・吊り方法・吊り間隔・1段の吊り枚数・1連の吊り枚数・ドリルの直径等について調べた。また、稚貝のそれまでの養殖方法等について、漁場水深・幹綱水深・稚貝の産地・稚貝採取の実施月日と収容密度及び使用した籠の目合い・第1回分散の実施月日と収容密度及び使用した籠の種類と目合い等について養殖漁業者から聞き取りを行なった。

結果と考察

表1に1986年から1991年までの調査結果から、平均殻長、平均重量、異常貝出現率、アゲピン割合について調査月別に平均したものを、また、図1に各月毎の平均殻長の推移を示した。その結果、平均殻長は1988年以降、次第に大きくなる傾向を示していた。特に1990年の調査では、6年間で最も成長が良く、1月で平均殻長63mm、2月で65mm、3月で69mmであった。同様に、平均重量も1990年が最も大きい値を示し、3月には32.5gとなっていた。

調査月別の異常貝出現率の推移を図2に示した。異常貝出現率は、1989年2月の調査では16.3%、3月は19.7%と最も高い値を示したが、その他の調査は1.2～3.8%と低い値で推移していた。

現在耳吊り養殖に用いられている吊り資材は、テグス、アゲピン、つりループ等がある。作業能率

表1 各調査年における測定結果

調査年	月	調査点数 (点)	平均殻長 (mm)	平均重量 (g)	異常貝出現 率 (%)	アゲピン 割合* (%)
1986	2	11	55	14.8		
	3	11	59	19.8		
1987	2	10	54	13.6		
	3	18	57	18.4		
1988	2	13	56	17.3		
	3	23	62	25.4	2.4	47.8
1989	2	18	59	19.7	16.3	33.3
	3	14	65	27.3	19.7	28.6
1990	1	8	63	22.2	3.3	50.0
	2	20	65	25.8	3.8	45.0
	3	15	69	32.5	1.2	13.3
1991	1	10	54	13.8	1.5	55.6
	2	17	60	18.9	1.8	46.7
	3	35	65	28.9	1.6	82.4

*アゲピンの割合は、吊り方法でアゲピンを用いている調査点数の割合。

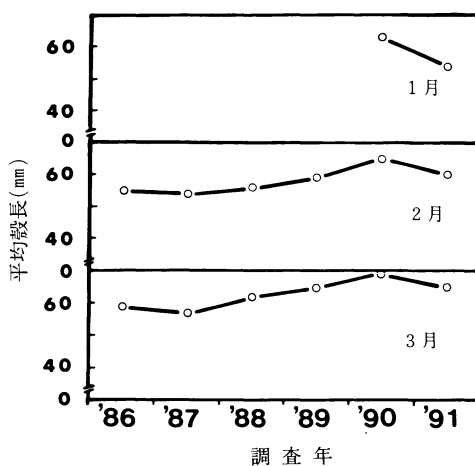


図1 各月毎の平均殻長の推移

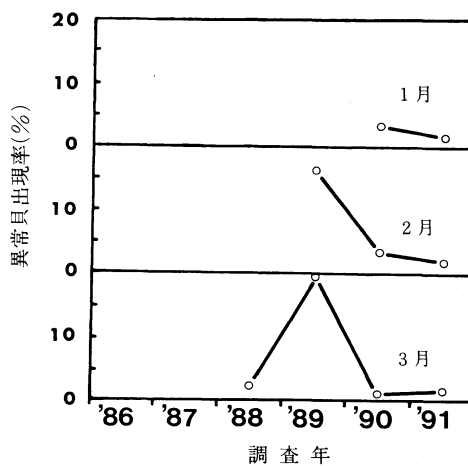


図2 各月毎の異常貝出現率の推移

では、アゲピンがテグスやつりループに比べるとはるかに良く、その反面、テグスに比べ単価が高く、強度が弱いために付着物が多くなるとホタテガイが脱落することがある。吊り資材に占めるアゲピンの割合を表1に示したが、月によってかなり変動があるものの、アゲピンの割合は増加傾向にあった。また、1段当たりの吊り枚数では、2枚吊りが主体であるが、依然として3～4枚吊りのものがみられ、そのため1連当たりの吊り枚数も増え、陸奥湾全体の過密養殖の原因の一つになっていると考えられた。

引用文献

青山禎夫 (1988) : 陸奥湾におけるホタテガイ耳吊り養殖の推移, 青水増事業報告, 17, 82-85.